「生活科」の研究

－『初等科生活』田植えの授業にみる新しい教育理念の検証－

白水　完児*・佐藤　　登・池上　　敏・石川　正一*
佐々木瑞枝*・川口　政宏・日高ゆうこ**

Study of Social Life

Kanji SHIRAMIZU*, Noboru SATO, Satoshi IKEGAMI, Shoichi ISIKAWA*,
Mizue SASAKI*, Masahiro KAWAGUCHI and Yuko HIDAKA**.

(Received November 29, 1996)

はじめに

平成八年度。五名の教官が手探りの状態で『初等科生活』の授業を開始して五年目、やっと授業の感想の中に「楽しかった。それに先生たちが妙に生き生きしているのが印象的だった」と、嬉しい言葉が登場した。

しかしその一方で、小学校現場の教師からは「発足当時のあの高まりは何だったんでしょうか？」とか、「どうも生活科の教科書通りに授業がうまく行かないんですが……」と言った、落胆【らくたん】の意見が聴かれる。

戦後、均一な人間を生産しながら、比較と競争主義を取り入れた学校教育システム[7]は、いじめ・登校拒否・子供の自殺など深刻な社会問題を生み、内部から壊死【えし】を始めた。このような事態に至って改めて教育の本質が問われ、「真の学力とは何か」を問う新しい教科「生活科」が設けられた。

言うまでもなく教科の教育にはそれぞれの教育理念と教育技法がある。では全く新しくこれまでのどの教科にも属さない「生活科」の掲げる教育理念とは何か？。教育学部小学教員養成課程の授業、『初等科生活』田植えの中に、新しい教育の理念を検証してみたいと思う。

＊山口大学教育学部『初等科生活』非常勤講師　　＊＊共同研究者山口大学教育学部大学院進学

Ⅰ　はだし初体験

人間以外に履物【はきもの】を履いて歩く動物は、蹄鉄【ていてつ】を履いた馬くらいしか知らない。足裏の皮膚で体重を支えて大地に接する動物的感覚は、随分と退化してしまったように見える。

初めて『初等科生活』で田植えをしたときのこと、「どうしてはだしにならないんといけないんですか？。チクチク痛いし、それに怪我でもしたらどうしてくれるんですか？」と、質問の威を借る拒絶の意見が続出して、教官連を唖然【あぜん】とさせた。「嗟、【ああ】現代人は裸足になることに恐怖を感じているのだ！」と悟って、次年度からは次のような指示を与えることとした。「さあ、これから田んぼに入ります。田んぼに入ったとき足首を捻挫【ねんざ】したり、怪我をするといけないので、今から足首をほぐす体操をします。腰を下ろして履物と靴下を脱いで下さい。最初に指を一本づつほぐして、足首を回し……最後に膝の屈伸運動をして……」。

不安を除去すればためらいが消える。過去の知識偏重教育のおかげで、知識の中に没してしまった動物的感覚を取り戻すこと、感性の復活から田植えの授業が開始される。

初めてはだしを体験した感想は「ちょっとチクチクするけど、くすぐったいような変な感じ」と、至って素直なものである。

Ⅱ　泥水の洗礼

さて、はだしの初体験を済ませたら、次は田んぼへと足を向けよう。しかし、さすがは現代人。ただでは田んぼに入ろうとしない。ようやくはだしには慣れたものの、泥水を張った底の見えない田んぼを目の前にしたとたん、新たな不安に駆られたようである。ある女子学生が、「あのー、先生わたし肌が弱いんで泥水にかぶれるかも知れないんですが、それでも田んぼに入らなくちゃ田植えはできませんか？」と、理論的に答えようがない支離滅裂な質問をしてくる。さらには、何の躊躇【ためら】いもなく泥水に柔肌を浸した農家出身の友人に「ねえー汚いことない？　恐いことない？」と、これまた意味のわからない質問を浴びせて、知識を先取りして何とか不安を取り除こうとする者まで現われる始末。

実体験よりも知識取得を重視した、過去の教育の致命的欠点が、ここでも顔を覗かせてくる。

黙って柔肌【やわはだ】を浸せば、暖かな水と泥に包まれる快感。たちどころにここがすべての生命の母胎、生活の場であったことを実感させてくれると言うのに……。

二回目の田植えの折には過激な男子学生が現われた。数人の仲間と田んぼを転げまわって、その全身は泥まみれ……。おそらく幼児期に泥遊び・水遊びの体験をさせてもらえなかったのであろう。二十歳を過ぎて初めて目覚めた生理的快感に、若い男子学生が少々ハメを外したとしても、それは容認しよう。自身の内に躍動するものがある確かな体験、これもまた『初等科生活』の意とする所だから。

Ⅲ　米の草

いよいよ植え付けようと苗を配り始めると、決まって出る質問がある。「先生、どうしてこ

の草がお米になるんですか？」。やっと目覚めてくれた知的好奇心に心を踊らせ、教官連がその持てる全ての知識を、ここぞとばかりに浴びせ掛ける。（先生たちはこの時を待ちこがれていたのだ！）

「これは草じゃないヨ。早苗【さなえ】と言ってネ、籾【もみ】から一月育てた稲の苗だヨ。籾を蒔くのは桜の華を見てから丁度一月の頃、そうだ丁度子供の日頃かな。今はこんなに小さいけど、これを植えると株が殖えながら大きくなって、八十八回手をかけると穂が垂れてネ。だから米と言う字は八十八と書くんだヨ。稲の実だけ採ったのが籾、籾殻を外したのが玄米、玄米を撞いて精米したのが白米、これを炊飯したのが食べるご飯。水加減は普通二割増しにするけど、新米の時は一寸控え目にして……」と。良く考えて見れば教育をしていると言うような意識はない。ただ先に生まれた者が後に生まれた者に、自身の体験した感覚を言葉に乗せて伝えているに過ぎない。そしてこの単純な伝達行為が、学生たちと教師にとって妙に楽しく感じられる。この時伝えられる知識は、植物学に始まり民俗・国語学、果ては調理栄養学から怪しげな民間伝承風俗の数々に及ぶ。知識に制限はないのである。

いったい、教室の中で教師が黒板と教科書を使って教えられる知識とは、どれ程のものであろうか？　学生たちの開かれた好奇心は教科書の枠を越える雑多な知識を、見る間に吸い込んで行く。その好奇心の扉を開けることよりも、試験の成績と評価を上げることに腐心してきた教育技法がなんと無用なものに見えることか。自発的学習の介助者、教師の冥利【みょうり】はここに尽きると言っても過言ではなかろう。

Ⅳ　泥おとし

この地域には田植えが済むと『泥おとし』をする習慣がある。苛酷な労働に耐えた身体への労りと、豊作への期待を込めたささやかな食事【たべこと】がこう呼ばれている。

この時の献立は白飯のお握りに梅干し、菜は旬の筍煮しめ、さらに男衆には一口ばかりの酒が付くと、至って質素にして贅沢なもの。共に働いてくれた牛の泥おとしも忘れてはいない。大好きな味噌汁のたっぷりとかかった餌が、疲労を回復させてくれる。

習慣に従って『初等科生活』田植えの授業も泥おとしで締括ることにし、それなりの献立を計画させてみると……カレーライスにバーベーキュー、後は焼きそばにサンドイッチ程度のメニューしか登場してこない。なぜであろうか？。

腹がへったから喰う、喰わなければ生きて行けないと言う生物学的本能的な欲求にもとづいて食べるのではない。先に与えられた給食を時間内にどう残さず食べるかと言う給食指導（マニュアル）を教えられてから食物を与えられたのである。食欲さえも管理して来た学校教育のすさまじさに、ただ唖然とするしかない。学校の給食指導とは一体何の教育であろうか？[13]。また、便利指向の世の中に流されて、「手軽に」「簡単に」を盾に時間の節約化を図り、教師にとっては手間のかかる体験学習なるものを省いてきた結果でもあろう。学校で時間を節約したところで何になろうか？

先の『泥おとし』の献立を生活科的に分析して見よう。まず梅干し入り白飯握り、きつい労働で短期間に血糖を消費する場合は、澱粉質を摂ると言うのは栄養生理学の常識であるが、これに良く合致している。更に梅干しの酸味は想像しただけでも唾液を分泌させ、消化を助けて

その酸味成分には疲労を回復する働きが知られている。しかし、この握り飯だけでは栄養学的に不足するものが出てくるので（特に動物性蛋白質）菜で補う必要が生じて来る。一見筍の煮しめには動物性蛋白が含まれていないよう見えるが、これの具は、産卵を終えてお役御免になった地鶏のブツ切りがどっさりである。この地鶏の肉と言うのが肝心なところで、日光の当らない鶏舎で輸入餌を与えられ、ブヨブヨに太らされたブロイラーチキンとは栄養の濃さが違う。その代わり当地で「しわい」と呼ぶように肉質は固く歯応が強い。この「しわい」肉を筍と炊き合わせて、双方を軟らかく栄養価の高い料理に仕立てるのは、生活の智恵である。更に男衆が飲む一口の酒、これにも重要な意味がある。アルコールは澱粉質よりも早く燃焼して労働に必要なカロリーを作り出す。ならば女衆にもふるまうのが理屈だが、女性は自分の体脂肪を燃焼させて労働に必要なカロリーを作らねばならない。ブヨブヨに脂肪の付いた雌は子を孕【はら】まないと言うのは、すでに畜産の世界では常識である。

おわりに

本稿の「はじめに」で、『初等科生活』の先生たちは妙に生き生きしているとの感想を披露したが、真に的を射た印象ととらえている。自分の面白かった体験、楽しい思い出を悲しそうに語る者は稀であろう。授業の時にこれだけのことは教えなければとか、学生たちに私語をさせないようにとか、妙な義務感をしょいこむと、教師自身が良い教育をしたいと思う「勝手な教える側の枠」にはまってしまう。そして、この瞬間から学ぶ者にとっては好奇心の目をふさがれた退屈な授業が始まる。硬い椅子に座らされ、口を開くことも禁じられ、一方的に教師の言葉を暗唱させられ、そして試験と偏差値で選別され……。教育が教師のためにあり、苦痛に満ちた洗脳であってはならないはずであるのに。

佐藤学は「学びの文化とそのディレンマ」の中で、『教育の中には創造性とアイデンティティを至上とする文化と、模倣と達成を至上の価値とする文化があって、対立混乱している。我が国の教師の大半は模倣的様式の授業と学びから脱して、変容的様式の教育に改革することを、憧れるのだが、教育内容も教室も、教師も子供も模倣的様式の伝統から脱していない。学びの改革の難しさは、このふたつの教育文化のディレンマにある』と述べる[1]。この論に従えば、冒頭に出た現場の教員の苛立ちも良く理解される。彼らは未だに「生活科」をこれまでの教科と同じ模倣的様式の枠で考えようとしている[2]のである。すなわち、『「生活科」をどのように教えたら良いか？』[3]あるいは『どのように評価したら良いのか？』[4,5]と、その視座は過去の模倣と達成を至上の価値とする教育技法論[6]から離れることはない。

模倣と達成を至上の価値とする文化の中で育てられた現在の大学生にとって、『初等科生活』の体験を重視する変容的様式の教育[7-11,12]は、多くの戸惑いと苛立ち、それに不安を生じるものらしい。曰く「田植えをしないと良い評価が貰えないんですか？」、「地方大学の授業では出来ても、都会の学校には田圃ないし、ＰＴＡや校長それに教育委員会が許してくれないだろうし……」、「こんな事したって成績はちっとも上がらないのに時間の無駄じゃありません？」

明治二十三年、現人神【あらひとがみ】の詔【みことのり】として発布された「教育ニ関スル勅語」以来、教育の理念は常に教育を施す者の側の手が握って来た。しかし、1993年文部省は「小学校生活指導資料　新しい学力観に立つ生活科の学習指導の創造」を発して、教育の理

念の一部を当事者に委【ゆだね】る改革を行なった。教育を学ぶ側の者の立場に立って考え、教師は徹底して学ぶ者の支援と、介助の側に回ること。大学生の「生活科」・『初等科生活』田植えの授業に見られた様々な事象は、未来の教育が掲げるその理念[11,12]を実感させるものであった。

余章 『初等科生活』の筆記試験

この年（平成7年度）の『初等科生活』は「稲刈り」をもって採点・評価することにしたが、他の科目の試験が直前に行なわれるため試験会場に移動出来ない者がおり、このため『初等科生活』の試験は教室での筆記試験でも、「稲刈り」の実技試験のいずれでも単位の取得は出来るものとした。模倣様式の教育と変容様式の教育をまっこうから対立させて、そのジレンマの中に学生たちの選択を求めて見たわけである。

実技試験の組は自分たちで植えた稲がどんなに実っているかの興味と、この試験が競争や選別の目的でないことを理解しているから、田植えの時のような逃げ腰の姿勢は感じられない。「長袖を着てやんないとちくちくして痒くなるぞ」と、注意しても「いいの、いいの、自分で植えた可愛い稲だから……」と、言うことだけはもう一丁前のお百姓衆。「田植え」の時は裸足になることさえ恐かったあの「生活一年生」も、垂れ下る稲穂同様やっとここまで育ってくれたかと教官一同も安堵の胸を撫で下ろす次第。

いっぽう筆記試験の組は悲惨である。解答用紙の余白に実技試験が受けられなかった恨みの言葉がびっちりと書き込んである。中には「授業では体験の大切さと、学習意欲について教えておきながら、最後にペーパーテストで評価とは何でしょうか？。こうなったら留年してでもきっちり実技試験を受けさせていただきます」と、過去の模倣様式教育の盲点をずばりと突いた回答と、直前に試験を実施した教官に対する恨みの脅迫じみた批判さえ現われる始末。

参考文献および参考書

1）佐藤学 「学びの文化とそのディレンマ」教育と医学 1996年9月号 17－22頁
2）「小二教育技法」1996年10月号 小学館
3）「生活科授業研究」教員養成基礎教養研 究会編 1992年 教育出版
4）「生活科の学習方法」 大野連太郎、加藤幸次ほか 1988年 中教出版
5）「新しい評価観と学習評価」 北尾倫彦編 1996年 図書文化社
6）新版「集団保育とこころの発達」 近藤薫樹 1978年 新日本出版社
7）「学校再生への道」 藤本信一 1996年 みくに書房
8）「特集・何がやる気をもたらすか」 教育と医学 1994年4月 慶応通信
9）「特集・息抜きの効用について」 教育と医学 1994年8月 慶応通信
10）佐藤登 白水完治 池上敏 石川正一 佐々木瑞枝 川口政宏 「コース制にした『初等科生活』の授業 教科教育研究第12集 1994年 第一法規
11）「生活科教育の理念と実践」佐藤登 福田隆真編 1996年 三晃書房
12）小林チエ子「感覚教育に評価はいらない」朝日新聞 平成八年十一月十八日『論壇』
13）「特集・食と教育」教育と医学 Vol.14 No.11, 1996年 慶応義塾大学出版会

写真１　田植風景（６月８日）

写真２　田　　植　　風　　景